

1 教材解釈

学年	教材	検討内容
1年 1学級	いちねんせいの うた	言葉の根拠がないことには教材解釈はできない。解釈がわからないままに子どもたちと授業をするのはよくない。子どもが様々な意見を出してきた時に、根拠がなければ、子どもは納得しないし、イメージも膨らませることはできない。発問はその目的をはっきりさせるべき。 「あおいそらのこくばんになにかこう」という第1連から変だおかしいが満載であるが、なぜ「ー」と書くのかは証拠がなく、難しい。作者の感動はどこにあるのか、が捉えにくい。
5年 H学級	からたちの花	夏の会で学んだ「5練ジャー」を意識した教材解釈ができた。「作者の意図を越えた豊かな誤読」をするためには、「よ」という言葉一つではなく、周辺の言葉を一つ一つ丁寧に見ていく必要があるだろう。「みんなみんなとは誰?何?」「白い白いと二回も言うのはなぜ?」という問題を考えても、根拠がないので難しい。子どもたちの中に読みの違いが生まれることを楽しむのが良いか。

2 記録と分析について

学年	教材	検討内容
N先生 より	カレーライス	<ul style="list-style-type: none"> 自分の授業分析をすることを大切にしたい。新しく取り組んだ授業について見直すのもよいが、前に起こした記録を読んで、どこで切れるのか(今、何を考えているのか)という視点で分けて考えてみることも大切。そうすることで、自分の授業の組立、展開の問題点が見えてくることがある。何が課題になっているのか、子どもの意見をどのように自分はまとめているのかなど、振り返っておくとよい。 子どもから何が出てきても、そのことを予想しておき、どんな解決方法があるのかを考え、組み立てておかねばならない。そのためにも突き詰めた(根拠を明らかにした)教材解釈が必要である。

3 次回から

自分で一つ「これだけは」という教材に取り組むこと。過去の自分の記録なども見返し、問題点を明らかにしながら、丁寧に取り組むこと。新しい発見をしていくこと。